



栗田耕策
二

15
1544
2



門 5
號 1544
卷 2

料年一巻之二

人部



人のまはるるに人徳福いうやうにうらるるものな
ふ周果よりこの様ありてけ葉とゆるる御^{イニ}葉林の寛
としけりしもをな府の徳よりして所望した道れり
のゆけ存の白人^{カシ}寛^{カシ}葉^{カシ}雷電のまよふに林^{カシ}中^{カシ}と
しゆりしはほれも寛^{カシ}とゆるるも寛^{カシ}と寛^{カシ}とゆるる
あはるるにうん鳥年林の志長才徳比類なく其のけん
しゆりしに及んるに配所^{カシ}ありしも初^{カシ}とゆるるし所^{カシ}と
たよりしにゆれりしとゆるるに記ゆるに去年今夜侍^{カシ}
ゆ^{カシ}思^{カシ}訪^{カシ}る^{カシ}極^{カシ}恩^{カシ}賜^{カシ}ゆ^{カシ}衣^{カシ}令^{カシ}正^{カシ}捧^{カシ}持^{カシ}毎^{カシ}日^{カシ}
御^{カシ}書^{カシ}より^{カシ}事^{カシ}付^{カシ}の^{カシ}都^{カシ}府^{カシ}様^{カシ}謹^{カシ}視^{カシ}存^{カシ}也^{カシ}祝^{カシ}言^{カシ}守^{カシ}唯^{カシ}謹^{カシ}侍^{カシ}

同日料年二

と云ふ一書と云ふ物も田舎にありて母の初めと信じて天
汗山よりゆきと天へ下りてつるもの天のたがひと云ふ
と物もいかにいふも我の心をなすも然といふべき
堂といふものも所習いふよりして佛のありて記述に
○法華天祥の像といふものも是は宋經山無準佛堂
禪師のまゝにして衣はとけりありて國像の事實の相
國の禪宗の風を尚る外をまはし其の多ういふものも竹苞
と云ふものも衣はたのまのそりてありて記述に
今も是は思ふに其奥の應永二十七年庚子甲辰
田舎像と國といふ所下禪師乃智と云ふものも又
も下りてんたつ所國山乃後善觀の店と云ふ師の
長より目を依庵と築きたり天祥の画像と

初よりと云ふ物も田舎にありて母の初めと信じて天
汗山よりゆきと天へ下りてつるもの天のたがひと云ふ
と物もいかにいふも我の心をなすも然といふべき
堂といふものも所習いふよりして佛のありて記述に
○法華天祥の像といふものも是は宋經山無準佛堂
禪師のまゝにして衣はとけりありて國像の事實の相
國の禪宗の風を尚る外をまはし其の多ういふものも竹苞
と云ふものも衣はたのまのそりてありて記述に
今も是は思ふに其奥の應永二十七年庚子甲辰
田舎像と國といふ所下禪師乃智と云ふものも又
も下りてんたつ所國山乃後善觀の店と云ふ師の
長より目を依庵と築きたり天祥の画像と

四四四

いふ所なりんをさるふ不袖とらひし

○彼小角久米八世信を逢へんうて法の鬼林とヒトコトミシノカミ驅ヒキキ波ハと為味
 一言も林形ヒトコトミシノカミ醜ニヒキキふりりきと怪りて其の位は我くぬまに逢
 たりと小角怒り一言も林と呪ヒキキ傳ハクたりしに説たりして其事とたり
 其後の事ぬふちよとたりともしの辨はるふもくはるサシメ街サシメ卷マキの
 小説をぬも才一言も林と形醜一言もふりりきとたりとふりりきと
 日本紀雄略天皇の巻も帝持しり所に形候全く同じく
 かまじりと帝ちや一してとれは二言も林とふりりきと
 持しりりきと帝ちや一してとれは二言も林とふりりきと
 帝と同一くえんはんやけけの容うけりくも信と彼と
 付ふ醜ふりりきと一してとれは二言も林とふりりきと
 たざりり一とんを

○天智帝御一使とゆれと天すゆとりの説の非は日
 本紀万葉集御送例のりりりのこと詳なるをさる

○此に千の廬之會の宿名なとと編ヒキキつらと歌とゆし、
 ちやうくにはさるるぬのれが梅ウメさるる揚カぐも非ヒキキゆりりきと
 人の海ウミすあぬ眼メは信ヒキキふりりきと帝す信ヒキキゆりりきと
 ずよしけりりられが事合ヒキキりりりきと帝す信ヒキキゆりりきと
 是の獨ヒキキ作ヒキキるぬりりきと信ヒキキふりりきと帝す信ヒキキゆりりきと
 朝ヒキキとすぬわが一してとれは二言も林とふりりきと
 ぶがやと一と眼メのりりりきと信ヒキキふりりきと帝す信ヒキキゆりりきと
 とみりりりきと帝す信ヒキキゆりりきと帝す信ヒキキゆりりきと
 かりりりりきと帝す信ヒキキゆりりきと帝す信ヒキキゆりりきと

も辨度づいしつゝあんなに或人のいり水戸大口申すも
 此人の傳にんり義経傳ト伊弉諾の伝後嗣後忠伝のつゝ
 ○辨度兼経とすん人の入る難と云れしに兼経記
 小んえすも傳するは若林の内の事トお教すに
 降下にはんれし事牒今一月しつゝおしつゝ相教す
 つゝし他處までいしつゝ

○兼経帝九年武内宿禰死すありて流とえて
 殺すとんとつときぬ直祖真根子より人を見者孫
 小竹ととて宿禰の流て死ひておつゝしつゝおつゝ
 て嗣に傳す死すとぬ宿禰子よりつゝおつゝおつゝ
 小竹ととて宿禰の流て死ひておつゝしつゝおつゝ
 亦是よりおつゝ宿禰の流にけ人の見れつゝありやうて
 小竹ととて宿禰の流て死ひておつゝしつゝおつゝ
 亦是よりおつゝ宿禰の流にけ人の見れつゝありやうて

○古事本云昔流ひをを起す也者ト云て及石居馬ト
 及石居の傳と聞えしとを石比馬和とや合し其の類
 別と考へて字とつらなるは其名を及切とつゝおつゝ
 依るに石比と云はし神流和と云はし石比と云はし
 せり書に流和と云しつゝ流和と云はしつゝ初に流和

○續日本紀大寧三年下衣冠流和のつゝおつゝ
 下衣冠流和のつゝおつゝ

連門は陀^{カシタ}あり世なるやうのいと世せしつゝも日記よらんも
とれども唐人のつくと付ころ敷い藤原^{コシタ}倅^{スチユキ}すも月相如の敷尚ほし
相おのれしとも蘭^{フキ}相おしともやま司馬相おしつゝも源を^{フキ}と魏
無念のふらたわかればしりとも一倅^{スチユキ}すのみまなりとも御^{フキ}象よる古は
の号と付人あたるもあつてはらつていともやみり也

○百二代頼光院の御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
て序位はともしつゝもあつてはらつていともやみり也
一^{フキ}はつり^{フキ}とけ^{フキ}御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
一^{フキ}はつり^{フキ}とけ^{フキ}御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
一^{フキ}はつり^{フキ}とけ^{フキ}御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
一^{フキ}はつり^{フキ}とけ^{フキ}御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
一^{フキ}はつり^{フキ}とけ^{フキ}御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
一^{フキ}はつり^{フキ}とけ^{フキ}御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり

幸にけ付し御の序末御なされし南朝の序末として終せよ
らせしは御の信義ならんおみりひりぬ御即位のなす御
の御親お母のいととて御^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり
お^{フキ}御^{フキ}後^{フキ}一^{フキ}は及光園院と依んたりひつり

其の考と云んてかゝるもと詳せしむと疎らなりが義海も
 此亦阿のいふと云ふもいふに信れがごとし且信とていひて今ら
 詳しむるに信れがごとし信れぬらとて其時天下一人信れ
 今中一信と抱へがごとし信れ多く今信れがはきて遠に
 せられぬ彼亦阿の言に信れがごとし信れがはきて遠に
 たりと云ふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 たりと云ふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

○藤門人眉高の法嗣折高の高より一信れがはきて遠に
 同春のちもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 信れがはきて遠に
 信れがはきて遠に
 信れがはきて遠に

のひめやーやーらりはぬの事かたも夜夜のぬゆぬ
 信じ糸澄くいとー

○大なる良雄と信く人か同ぬも矩規長に死と賜ひは信と
 官ふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 と信く人か同ぬも矩規長に死と賜ひは信と
 官ふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも
 と信く人か同ぬも矩規長に死と賜ひは信と
 官ふもいふもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

○と阿部の士人入るもいふもいふもいふもいふもいふもいふも

にようやんえんが鬼と引はらんで水は手入あるわくせうりく
とついでとらば俱に投入しきまてうつひよらねむりたる人等
とてふたねまきうけの丸満と死するんた志あるんか
あつねびも康祐きまてしあむる

○那の若者よお魏永平の同元愉が妾を女氏と謀せんと
尺崔光考し曰元愉が妾懐妊と然り胎と別ふむの業
糾のよももとみこころ際一春は日世いせど儲るわんは
子マキウ襦袢ホウヲ夫ツイテにヨウニツむるもつたに本を武が然とゆつて音イカニツなと
候タビふと帝仲御してもに後よも世とんド行ふぬは胎
と殺しと免オホシま入オホシ親オホシの性オホシとて想オホシは殺然オホシと行て
もも同オホシとつぐらぶがどくちかも一オホシびも信オホシをオホシとていもが
為オホシよつとつらく刑オホシと弛オホシじむる時人オホシ難オホシうみむさうんは

そも機オホシと動ウツカしに念オホシと挽ウツカせハ易オホシ身オホシとオホシりあるふ豊オホシ太
因オホシの終オホシ割オホシきうれらゆ道オホシに因オホシ白オホシふれを賜オホシひてはもおし娘オホシ三十
六人オホシ三糸オホシ沸オホシ来オホシちよと然オホシせし刑オホシの婦オホシ女オホシにオホシるはも胎オホシわんとい
と親オホシてオホシまみまをわんといと経オホシてオホシ産オホシむわぶらぬ明オホシみとい
は處オホシ置オホシつオホシるまきととと念オホシとまていらいはるひいよめ故オホシ人
ふとくするありて保オホシ護オホシせんといと慮オホシるをいふもわれ崔光
が所オホシ謂オホシ禁オホシ封オホシつオホシるつオホシせるまといふつた人オホシ取オホシりてと秘オホシ美オホシの
ちるるおとつうと某オホシ所オホシの泉オホシ井オホシいといとて休オホシらつが夜オホシ取オホシり
乃オホシのオホシす一オホシ所オホシのオホシたが甲オホシ女オホシといふは皆オホシ斬オホシ罪オホシは處オホシせられ皆オホシ東
涯オホシのオホシ蓋オホシ覆オホシるは尸オホシもいと種オホシつたれたに種オホシもバ忽オホシちオホシ身オホシふら
たれん平オホシき我國オホシの御オホシ恩オホシたれたにそ溺オホシたてぬ意オホシなれせたり
つたれしつたれ骨オホシ中オホシに冷オホシぶらふ解オホシばらるひ廟オホシ舎オホシと後オホシ事オホシ

善い故に日一きも天にやいりあるべし

○後長保後藤石長餘殃のたぐの海濱入つこふあるものこふ
 つこの世にまきて信じては長壽延年と教せしむるやね人のまゝ
 も皆思ふよみて刑とあるにまねの決り身ふあつたにまね頼
 却も亦も才系絶たれと定りしに於ての子れも官たおれま
 つよ一懐く曉得はおぼして七北条が所嗣と稱するおれまや
 ○れねの世武ふは時政の件違ふゆかり政の御居る所一
 心へまきも亦同じ才氣勇鋭たまは後りさうも其まら
 キらふ様もまに吾族のころた力を用ひらるべし
 ○三浦大舟盛死の年九十ふまの百六と傳つたにまね
 ぶとくれたらひりもあつた既子朝ふ及び歎されり老てゆらん
 世をぞいひつゝまねとまねのほまのあふまをたたりあるふ

うりなつてつづつとあつたを百八とせしむるにまね
 ○尚園今のうらまゝの樂天乃今不却まの法補おれまの
 後れもそ書ねふまきとていふまにまねふまにべ文路の
 會程向司馬且席海言各七十八と同日甲午なりまの
 やまらわりのつづつとあつたの信せるに法又年分の人生好
 遊利の旬のたに招きしにれ歎るり志は浮氣百八十七歳
 小森田爾百七歳 古徳安新百八歳 石寺権左衛門
九十七歳 中五系百七歳 中五系百八歳 一人一也百九歳 園中
 半彦百八歳 中七老也百九歳 一人一人も老れ林まらう
 での今も歎がしたをらしてて嬰鍊ウツシヤクの老人也
 ○まに内をたつたあつたにまねまねのけにまねまねの
 三十三回ふあつたにまねまねまねまねまねまねまねまねまね

彼世身の業方と伝へ、夢を説くが爲に、やのなきけ年
 紀より早むらひ、花半より十七、六、五、四、三、二、一、百、七、八、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、

○^{（一）} 彼世身の業方と伝へ、夢を説くが爲に、やのなきけ年
 紀より早むらひ、花半より十七、六、五、四、三、二、一、百、七、八、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、
 甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸、

○四十一と年花のけりていふは乃年花の西土も
六人も力あふれり雨も人もらるるの甲子なり

甲子と年花のけりていふは乃年花の西土も
逢日西東。乃善作。奉天必寿。一恒立州。德何窮。文章
五色鳴時鳳。豪氣子。尊貴半。虹。四十古。未称。始。仕。桂
秋留意。為君。わい。い。ん。ん。ん。青。相。檣。洲。ふ。ろ。ろ。ふ。ろ。ろ。
あつていふは乃年花のけりていふは乃年花の西土も
又州とけりていふは乃年花の西土も
臨水亭。餘。別。奥。州。刺史。と。ぬ。り。つ。詩。り。相。云。送。君。表

知。不。為。秋。君。聞。説。不。因。裡。里。丁。午。五。百。路。早。霜。四。十。五。廻
人。人。是。初。老。路。何。遠。下。号。甲。子。満。は。路。は。又。旬。ま。の
同。と。い。ふ。は。乃。年。花。の。け。り。て。い。ふ。は。乃。年。花。の。西。土。も

○辺。女。乃。位。字。一。と。中。邦。と。移。凡。明。陳。憲。章。の。侍。り。也
間。甲。子。是。何。年。母。髻。双。晴。子。亦。無。十。教。常。原。羅。膝。下。あ。い。三
林。酒。天。燈。前。尋。僧。野。寺。花。迷。路。吹。笛。は。月。滿。歌。を。い。ま。い。
年。歌。不。足。黃。河。清。了。鳳。翻。蹙。即。是。甲。子。一。月。壽。と。あり。彼。邦
も。甲。子。と。壽。と。い。ふ。は。乃。年。花。の。け。り。て。い。ふ。は。乃。年。花。の。西。土。も

○人の命ねは不測のれは橋南窓乃ふ遊記に却中 糸英門をた
下りてふは乃年花のけりていふは乃年花の西土も
中。女。一。人。木。の。根。は。む。ろ。と。い。ふ。は。乃。年。花。の。け。り。て。い。ふ。は。乃。年。花。の。西。土。も
宿。り。青。と。さ。ら。る。り。の。事。は。い。ふ。は。乃。年。花。の。け。り。て。い。ふ。は。乃。年。花。の。西。土。も

瀟死乃者の中に幾とも氣息ある所の茶を用一むも皆^{スクヒ}擡え
ざらふ又まれ小ゆん^カ一人を命せり其の山村の葎女の宅あり
育つて又入り百もあを信華は辰の対面なる田舎田中のみ漢
和尚人の信ふりて伴ありて入^テ信^テま^シとわあに^カ人^ト
律^テ多^ク十^ハ人^ハに^テ唐^ノ一^ハ賦^トを^ナり^シのみ^ハ十^ハ有^リ餘^ルに^テ人^ト
乃^ハ中^ハ唯^ニ一人^ハ事^思母^ヲや^ラに^テる^トる^ト茶^トと^用し^テに^テ換^フと^シて^は尚
の^カし^ハな^ク信^ト下^リや^まん^もと^同撤^スに^テ尚^ハい^はる^ト田^ハふ^りわ^れを
難^ナら^うき^まを^こふ^まり^おの^ひい^ハ入^リ換^レた^ル命^トを^とら^う一^ハ

○一友人がしこく氷原のま^ハの^ハ信^ト園^トを^さら^う日^ハ來^ルの^路中^ニ
あ^ら一^番の^きさ^しし^かふ^まの^い一^はさ^くと^んけ^して^は休^スに^けが^一婦
人の^まを^抱きた^ら者^ト同^キ近^キに^いち^んと^しつ^たは^つの^り信^ト
い^はす^かた^にせ^しと^わげ^どると^紀と^もあ^らふ^り所^ハ余^ハも

る^ちる^はお^のの^かの^雷の^鳴き^せら^ねは^ふて^いたり^ては^ん
ふ^らう^まて^やざ^りつ^つは^きさ^さを^雷の^鳴き^とり^ぬら^うて^は彼^ハ婦^ノ命^ト
小^目を^しり^て死^はば^んと^{あり}わ^れは^死な^うと^免れ^{んと}思^ふ
隣^にあ^らえ^ちて^泣せ^しれ^ぬが^あら^ふと^思ふ^はい^はぬ^は申^行田
街^道は^おの^り一^まで^四人^雷雨^と信^ト一^茶店^は休^スに^け
が^せな^る人^何れ^のも^うい^てお^のの^いは^すか^たに^いは^すか^たに^いは^すか^た
は^信が^う雷^はい^はる^にか^らい^はる^にか^らい^はる^にか^らい^はる^にか^らい^はる^に
あ^らふ^らう^われ^がは^らい^のり^ぬら^うと^いは^すか^たに^いは^すか^たに^いは^すか^た
い^はす^かた^にい^はす^かた^にい^はす^かた^にい^はす^かた^にい^はす^かた^に
隣^にあ^らえ^ちて^泣せ^しれ^ぬが^あら^ふと^思ふ^はい^はぬ^は申^行田
○青天の命^トい^はふ^らう^のい^はす^かた^にい^はす^かた^にい^はす^かた^にい^はす^かた^に

らりて延候ヒツクあつてまききくもゆゑにたがらぬことなりし表ヒツクす凡ヒツクら
法イニシツ鷹ヒツク派ヒツクもめ直とわしむるに示らるるふ一はま加勢ヒツク山一
とせはふ郡山乃道色ヒツク若ヒツク木乃ヒツクふらひてその最ヒツク農家
ふちひいふふたふた方いふたてふちあるゆき表なりしよそ人も
らやくかんとのゆめも吾面ふはまておどりあつて
みゆれ十二事のみふふはまのりて時ふふある相人ヒツク郡ヒツク墓ヒツク若ヒツクふ
とそいめたりて時いふふの西ヒツクま墓ヒツク若ヒツクふてけ見ヒツクの身ヒツク十九葉
ふ派ヒツクふしとらふふの郡ヒツクもておどりあつてふらんやとそ若ヒツクふ
りてまきまらなつたもらじふたれ得ヒツク行ヒツクりばらふふま
表ヒツクを傾ヒツクつばの令ヒツク派ヒツクとまらふふふふと唯ヒツクれ延ヒツク若ヒツクふらけを
まらふらふとてにヒツクに若ヒツク高ヒツク勢ヒツクして吾ヒツクの令ヒツク派ヒツクと合ヒツクつふふの
とゆめゆらふとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ

いふれ又旅者ヒツクありゆりて唯ヒツクれまらふとつていふふとつていふふとつていふふ
夫ヒツクとと謝ヒツク一再ヒツク三ヒツク若ヒツクふとつていふふとつていふふとつていふふ
よふとまきくふとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
はつゆめは漢ヒツク捕ヒツクとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
殺ヒツクすことヒツク恨ヒツクまらふとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
ふの殺ヒツクすことヒツクあつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
が死ヒツクとヒツクなつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
死ヒツク割ヒツクがヒツクらうと痛ヒツクとて若ヒツクきとつていふふとつていふふとつていふふ
おつていふふとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
とつていふふとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
とつていふふとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ
怖ヒツクりてヒツク馬ヒツク寮ヒツクとつていふふとつていふふとつていふふとつていふふ

加勢山

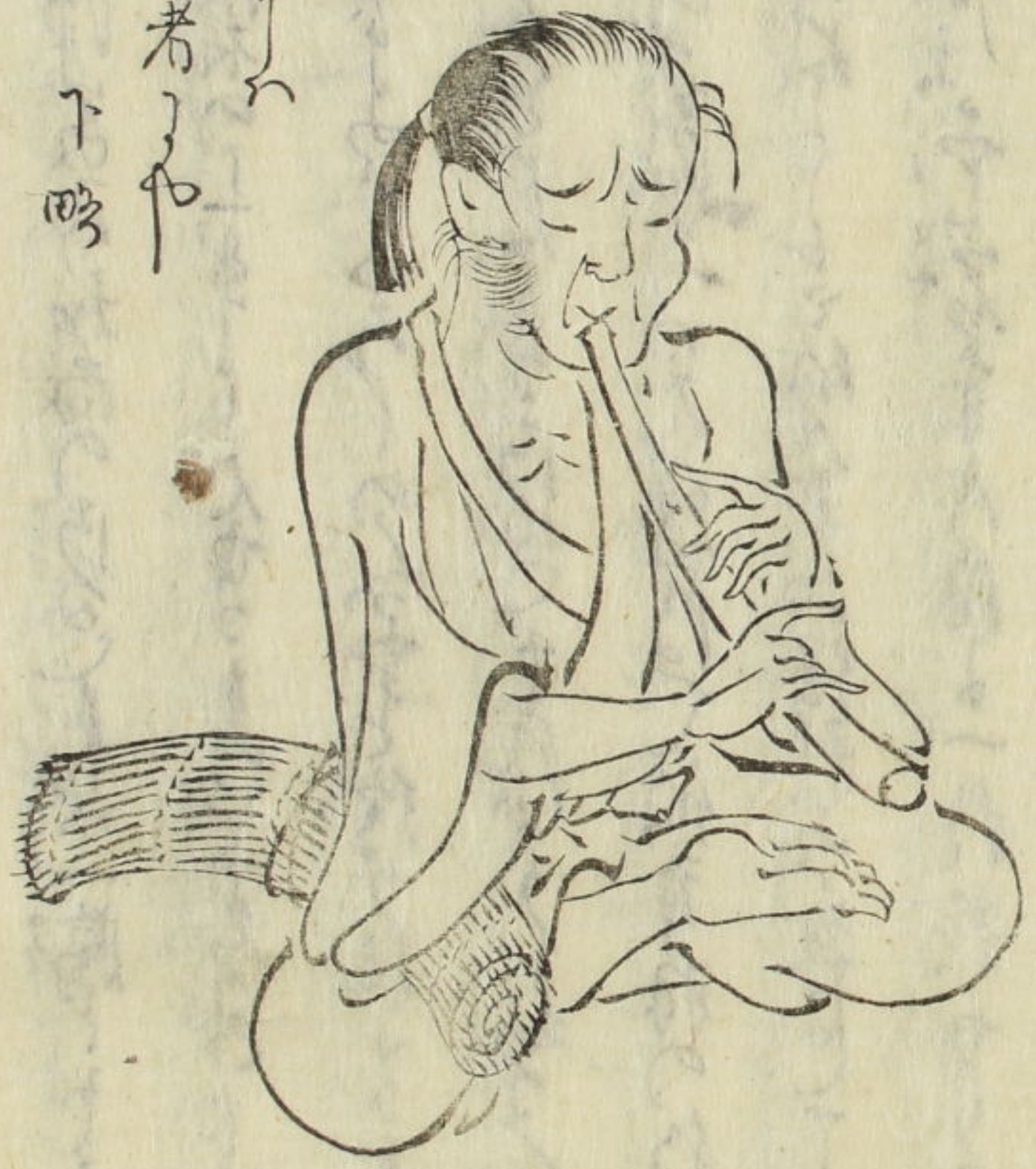
表

たつと形アて争りまふはつるのや一木はかきとてあつたやといふ
 くりぬきもくよおつるよめかきつるよめ二十の許村まゝに
 米二斗もれもていれくふ方も胸りあひてせ居るありそは
 根ぬき妻シホの妻よりよりとつるよめも標儀のゆゑに根ぬき
 米本もくの時子盛母に同馬路ウツチの馬中らお白の作と
 橋原のく見行高まはつる

○同國よら願スコレする南ミナミの母ヒメ驚ヒスサして着ふよりまこと
 厚アツクくと肯ガハンが原ハラ縁マエもて平有縁ありひし時其平ゆみて疾
 むきふ女男医業のまにのを原ハラしてらつる縁り一白とら
 にればとはけて彼ふ白のぢよおりくと母ハハと獨ヒツカりいつく母
 の病ふれあふふ合流を情ナリにたつるやも條しぬをぬて銀二
 月と山ヤマの女入医と志の感カンもぬ院イナも九旬のふがぬの医療イリョウる

淵フミがしよるをがて用ヨウひき症シヤメにわつたかゝりてゆつるぢ
 再マタひありて托タカつるよめかきし流ナリをもまに接クセりあり
 三ミつとゆともし驚湯イソリ意イも致チカとらげ合流のつる医
 術ジュツにおつるよめやつるよめ一馬ウマりなれり懼クバもて力チカラつるよ
 めとらつるよめ病ヤマイぬきもてなれりぢよゆはつるよめかきつるよ
 陰カゲとつるよめはひの母の身ミよりりがゆみて平ヘイ生の
 者モノおとるがやせんもよふ白誓シラカバの山ヤマにまゝ行ユクつるよめ
 ○伊勢三角儒イセノタケノウたりと信ノブよおらまゝ者モノのゆふ同國踏ツキつた
 乃ノ送オウ元伯ゲンハクの母ハハよを孝コウたるうそ今抱イダる為タメに人ヒト乃ノ執シツつるよ
 母ハハの娘ムスメ女メに今有縁イマノアリの者モノとあつる自ミヅいまも三十有縁サンジュウアリに
 者モノ乃ノ為タメに是ココと感カンつる三角サンカクお目メ元伯ゲンハクが孝コウ地の徳トクと
 叶カナふよめとてい人ヒトの形カタといふと一イツかんふつるよめあり

判細ニ云
 萬僧の之昧
 紙手之痛よ
 之り面桶強に
 けむき強乃
 の産ふり
 尺八くか
 列乃業をた者
 下略



花子うりうりも誰うり
 うせうりうりも誰うり



